

どう見る、どう見られる ～メディアと女性スポーツ～

私たちの生活にはテレビや新聞をはじめ、多くのメディアが存在し、価値観や考え方に影響を与えていることがあります。

ここではメディアと女性スポーツならではの問題を考えてみましょう。

「ママさんバレーはあるけれど…」

男性のように「〇〇選手」ではなく、女性アスリートの方が「〇〇ちゃん」やファーストネーム、愛称などで呼ばれることが目立つと感じたことはありませんか。

同じように男性選手では言われないのに、ママや主婦、ミセス〇〇など役割や立場を表す言葉を使われることも。また、美人アスリートなど外見や容姿を指す言葉もあります。

結果より美しさが大事

競技中の姿やユニフォーム姿より、笑顔のアップなど、まるでアイドルのような女性アスリートの写真や映像を数多く見かけます。

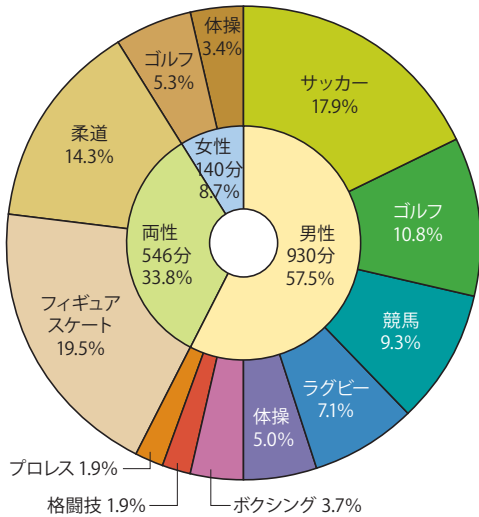
容姿や性的魅力を重視した伝えられ方は、女性アスリートが実績よりも美しさを求められ、見られる存在としての価値で判断されるからではないでしょうか。

テレビでよく見かける

スポーツは

スポーツニュースや中継の多くが男性スポーツを取り上げ、女性スポーツが日常的に扱われることは少ないのが現状です。

図表1 地上波テレビでの性別・競技別スポーツ放送時間



出典：「データでみるスポーツとジェンダー」
※2015年11月29日(日)～12月5日(土) 藤山調べ

実はこれは女性スポーツだけの問題ではなく、障がい者スポーツ（パラスポーツ）も同様です。

メディアを通じて女性のスポーツを目にする機会が増えることで、女性や障がい者のスポーツを応援する機会も増えることになりま。それはより多くの人が、スポーツを楽しむチャンスにもなります。

(佐野)

障がい者スポーツの分野で活躍する女性たち

障がい者スポーツは昨今、その競技性の高さにもますます注目度が上がっています。パラリンピックでも多くの女性たちがメダルを獲得しています。今回は、清瀬にご縁のある女性二人をご紹介します。

土田 和歌子さん



W-STAGE提供

清瀬市出身の土田さんは、高校生のときに事故に遭い、車いす生活となりました。アイススケート（スケートの刃が底についてたそり）の講習会に参加したことからレースを始め、長野冬季パラリンピックでは、アイススケートスピードスケートで金メダルと銀

メダルを2つずつ獲得。その後は陸上競技で世界中の大会やパラリンピックで好成績を収めています。2016年リオパラリンピックでは陸上女子車いすマラソンに出場し、大混戦の中、僅差の4位入賞となりました。転倒やけがなども経験しながら、競技と向き合う土田さん。2017年はトライアスロンにも挑戦されるそうです。

「今を受け入れ、今を越える」とは、著書のタイトルにもなっている、彼女の言葉。その姿勢は、私たちにも前向きに生きる力を与えてくれます。

(福田)

阿部 千子さん

ゆきこ

清瀬市男女共同参画センター職員

5歳の時から清瀬で過ごしている阿部さんは、耳に障がいがあります。両親から「狭い世界から、広い世界にもまれて成長してほしい」と教えられ、高校生の時にバドミントンと出会います。

現在は自身が楽しむだけでなく、全日本ろう者バドミントン協会の事務局として大会での審判、運営やSNSでの発信・啓発にかかわっています。2013年のブルガリアでのデフリンピック（ろう者のオリンピック）には、スタッフとして参加しました。（2017年は7月にトルコで開催）

バドミントンは「テクニクがあればパワーがなくともできるので、相手の裏をとる、心理ゲームのようなものが楽しい」とのこと。パラリンピックの精神でもある「失ったものを数えるな。

今あるものを最大限に生かせ」をモットーにしています。



(取材 高橋)

